
インフィニット・ストラト-少年とバグ機、混沌-

姫神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラト - 少年とバグ機、混沌 -

【Nコード】

N5381R

【作者名】

姫神

【あらすじ】

—千冬さんに助けられた少年、あきあかね秋茜 あせつ天羽のチート劇—

不定期更新です。

第一話（前書き）

第一話更新です。

第一話

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rをはじめますよー」
ショートホームルーム

黒板の前でにつこりと微笑む女性副担任こと山田真耶先生（さつき自己紹介していた）。

身長はやや低めで、生徒のそれとほとんど変わらない。しかも服はサイズが合っていないのかだぼつとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒縁眼鏡もやや大きめなのか、若干ずれている。

なんというか、『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さ……というより背伸び感がするんだが……。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」
「……………」

けれど教室の中は変な緊張感に包まれていて、誰からも反応がない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

ちょっとうるたえる副担任がかわいそうで、せめて俺くらいは反応してやるうかと思っただが、そんな余裕はない。
なぜか。

簡単だ。俺ともう一人以外のクラスメイトが全員女子だからだ。

今日は高校の入学式。新しい世界の幕開け、その初日。それ自体はいい。

だがしかしBAD、問題はクラスに男が俺ともう一人という点だ。

(……はあ)

クラスメイトほぼ全員からの視線は正直ウザイ。
だいたい、何なんだよこの席。一番左の最前列って……。

「……くん。秋茜あきあかね 天羽くんあもつ」

「……なんすか？」

「あ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？
怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介、秋茜くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、ダメかな？」

気がつくとも副担の山田先生がぺこぺこ頭を下げていた。しかしあんまり頭を何度も下げるせいで、微妙にサイズがあってない眼鏡が

ずり落ちそうになっていた。

てかこの人は本当に年上なのか？ 同い年といわれれば受け入れそうだが。

「……自己紹介するんで、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？ 本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。絶体ですよ！」

がばつと顔を上げ、俺の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。

しかしまあ、すると言った以上、引くわけにもいかないか。

しっかり立って、後ろを振り向く。

「……秋茜天羽です。得意な事は家事全般でこの一年で皆さんと仲良くやっていけたら良いなと思っています。これからよろしく願いますね」

俺は出来る限り爽やかにそして明るく挨拶をしたあと席についた。

……。

……あの時、あの人に出会っていなければ俺は復習の為にコイツを使っていたな。

俺は首にかけているISに触れ、過去を振り返っていた。

□ ■ □ ■ □ ■

「貴様は実験台なんだ！モルモット 生かしてもらってるだけ有り難いと思え
！」

「……………」

「なんだその反抗的な眼は！」

「……………」

俺はこの人間が何を言っているのか、何を求めているのか、何がしたいのかが解らなかった。

ただ、来る日も来る日も俺は同じ『物』に乗せられていた。

その『物』は俺が乗っても、微動だにせず。それを見ていた周りの人間は俺に変な薬を投与した。その薬は俺には上手く適応せず、毎回俺の身体は激痛に襲われた。

いつしか俺はこの人間どもにも俺と同じ苦痛を与えてやろうと思い始めていた。

そんな事を思いながら俺はいつものように、その『物』に乗ると今まで微動だにしなかった『物』が動いた。

その瞬間、俺の意識に直接流れ込んでくるおびただしい情報の数々。数秒前まで知りもしなかった『IS』の基本動作、操縦方法、性能、特性、可能な活動時間、行動範囲、センサー制度、レーダーレベル、アーマー残量、出力限界、e t c。

まるで長年熟知したもののように、修練した技術のように、すべてが理解、把握できる。

そして視界野に接続されたセンサーが直接意識にパラメータを浮かび上げらせ、周囲の状況が数値で知覚できる。

「……………?」

動く。動くのだ。今まで微動だにしなかった『IS』が。それも手足のように。

肌の上に直接何かが広がる感触——スキンバリアー皮膜装甲展開、……………完了。

突然体が軽くなる無重力感——推進機^{スラスタ}正常作動、……確認。

世界の知覚精度が急激に高まる清涼感——ハイパーセンサー最適化、……終了。

それらすべてがわかる。知りもしないのに、習ってもいないのに、わかる。

そして『IS』から送られてくる情報で見る世界は、まるで——

□ ■ □ ■ □ ■

そついや今は自己紹介の最中だったな。
今、自己紹介してるのわ……。

「えー……えっと、織斑一夏です。よろしく願いします」

ああ、もう一人の男子か。えっと、織斑一夏か覚えとくか……。

……そういや、あの人の名字も織斑だったな。

「以上です」

がたたつ。一夏の台詞でずっとこける女子が数名いた。どんだけ期待させてんだよ。

「あ、あのー……」

一夏は背後から声をかけられる。涙声成分が二割増しの山田先生。

パンツ！ という小気味の良い音と共にいきなり頭を叩かれる一夏。

「いつ——！？」

あの叩き方——威力、角度、速度。俺は思い当たる人物が一人だけいる。

「「……………」」

黒のスーツにタイトスカート、すらりとした長身、よく鍛えられているがけして過肉厚ではないボディライン。組んだ腕。狼を思わせ

る鋭い吊り目。

「げえっ、関羽!？」

パンツ！ と、また叩かれる一夏。
てか関羽は酷いだろ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーン低めの声。

——やっぱりあの人だ。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

あの人のあの優しい声に俺は救われたんだよな……。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

さっきの涙声はどこへやら、副担任の山田先生は若干熱っぽいぐらいの声と視線で担任の千冬さんへと応えている。あ、はにかんだ。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になるよう操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。」

出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

暴力宣言。間違いなくこれは・織斑千冬さんだ。

だがしかし、教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

「キャ——！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉様のためなら死ねます！」

きやいきやいと騒ぐ女子達を、千冬さんはかなりうつうつしそんな顔で見る。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

これがポーズでなく、本当にうつとうしがるのが千冬さんだ。

「きゃああああっ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰をして〜！」

……千冬さん、生徒が元気で何よりですね。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は——」

パンツ！ 本日三度目。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

……やっぱり、一夏と千冬さんは姉弟だったか。

「え……？ 織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ああつ、いいなあつ。代わってほしいなあつ」

「……………」

後で千冬さんと久しぶりに話してみるか。

そんなことを思っていると、チャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

織斑千冬、第一世代IS操縦者の元日本代表。
しかめ公式試合の戦歴は無敗。

「席に着け、馬鹿者」

千冬さんは一夏にそう言って座らせた。

「千冬さ……織斑先生」

千冬さんが持っていた出席簿微かに動いた瞬間、俺は織斑先生と言
い直した。

「秋茜かどうした？分からない所でもあつたか？」

「いや、そうじゃないんです。久しぶりに会った織斑先生とお話が
したくて」

「そうか、ところでお前の『混沌』は大丈夫か？ あの機体は第一
世代型だが多分、第三世代型でも手におえないからな」

「はい、今のところ『混沌』に異状はありません。ただ僕の方に戦闘、
破壊、殺人衝動が出るときがあつて……」

俺は千冬さんにそう言つと、千冬さんは俺の頭に手を置き、くしゃ
くしゃと撫でた。

「秋茜、その時は私の所に来い、私がお前の相手をしてやる」

「……はい」

いつの間にか俺の瞳から涙が流れ出ていた。拭っても拭っても涙は

止まらなかった。

いつの間にか流れなくなっていた涙は、千冬さんの優しい言葉によって流れるようになった。

「何を泣いている馬鹿者、此処にいる限り私はお前を裏切らないから大丈夫だ。だから泣くな」

「……はい」

「秋茜、そろそろ二時間目が始まるぞ。涙を拭いたら教室に戻れ、いいな？」

「はい！」

俺は千冬さんに言われたとおり涙を拭いたあと教室に戻った。

「アイツが私に涙を見せたのは初めてだな」

千冬さんがそんなことを言って、少しの笑みを浮かべていたことを俺は知らない。

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ——」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。

（こんなことやる必要性がないんだが……一夏は何でさっぱり分らないって顔してんだ？）

周りを見てみると、山田先生の話に時々うなずいてはノートを取っている。

IS操縦者が国防力に直結する昨今、いわばこの学園はエリートを育てるための機関だ。そして入学試験でもものすごい倍率を勝ち上がって来た優等生でもある。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

山田先生はわからなさうにしている一夏に、どこがわからないか聞いた。

「あ、えっと……」

「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生

ですから」

えっへんとも言いたそうに、胸を張る山田先生。

「先生！」

「はい、織斑くん！」

やる気に満ちた返事。

「ほとんど全部わかりません」

「……ぷっ」

やばっ！ 笑っちゃった……。

いつきにクラス中の視線が俺に集まる。
正直ウザイ。

「え……。ぜ、全部、ですか……？」

山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつった。

「え、えつと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

拳手を促す山田先生。

シーン……。

誰も手を挙げない。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端で控えていた千冬さんが一夏に訊いた。

一夏はというと――

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚える。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やれと言っている」

「……はい。やります」

俺は織斑姉弟を見て正直羨ましいと思った。

千冬さん、少し楽しそうだ……。

第二話

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と特訓だ。理解ができなくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ」

正論すぎて反論できるヤツなんかないな。

「……貴様、『自分は望んでここに在るわけではない』と思っているな？」

あ、一夏の顔が一瞬ひきつった。凶星か……。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」
「……………」

昔の俺が言われてるみたいで少し心に響くな……。

「え、えっと、織斑くん。わからないところは授業が終わってから放課後教えてさしあげますから、がんばって？　ね？　ねっ？」

「はい。それじゃあ、放課後によろしくお願いします」

「ほ、放課後……放課後にふたりきりの教師と生徒……。あっ！
だ、ダメですよ、織斑くん。先生、強引にされると――」

「山田先生。一夏くんは今の勉強が理解できないんですから、少しでも有効に時間を使ったら良いと思うんです。そして少しでも一夏くんに授業がわかるようにしてもらっていいですか？」

俺は山田先生の話を途中で遮り授業の続きを促した。

「は、はいっ！」

山田先生は俺の言葉に慌てて教壇に戻って――こけた。

「うー、いたたた……」

（……大丈夫か？ この先生……）

果てしなく前途が多難な気がする……。

「さっきは助かったよ。ありがとう、えっと――」

「俺は秋茜天羽だ、呼び方なんか何でも良いから好きに呼んでくれ」

「わかったよ天羽。俺は織斑一夏だ、一夏って呼んでくれ」

「ああ……」

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「あん？」

二時間目の休み時間、俺は一夏と話していた。するといきなり女子に声をかけられ。一夏は素っ頓狂な声を出した。

話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態で俺と一夏を見ている。

わずかにロールがかった髪はいかにも高貴なオーラをだしていて、その女子の雰囲気も『いかにも』今の女子という感じだった。

今の世の中はISのせいで女はかなり優遇されている。優遇どころか、もはや女Ⅱ偉いの構図にまでなっている。そうなると男の立場は完全に奴隷、労働力だ。今じゃ町中ですれ違っただけの女にパシリをやらされる男の姿も珍しくもないらしい。

つまり俺と一夏の前には『私は偉いのよ』みたいな馬鹿な女が腰に手を当て立っていた。

ちなみにこのIS学園は無条件で多国籍の生徒を受け入れなくては
いけないという義務のせいで、外国人の女子なんて珍しくもない。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど……どういう用件だ？」

「……………」

「まあ！ なんですよ、そのお返事。そしてそちらのアナタは無視
ですの？ わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、
それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「……………」

俺はこうゆうタイプが大っ嫌いだ。

昔のアイツ等を思い出して虫酸が走る。

ISを使える。それが国家の軍事力になる。だからIS操縦者は偉
い。そしてIS操縦者は原則女しかない。

だからといって、その力を振りかざすのは違う。力が粗暴なら、そ
んなものただの暴力にすぎない。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「……………」

一夏の台詞はこの女にとってはかなり気に入らないものだったらしく、吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

うざ……。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の勤めですね。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたつ。聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっとこけた。俺はというと溜め息しか出なかった。

「あ、あ、あ……」

「『あ』？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう。知らん」

言い切ったよコイツ……。

「……………」

この女は怒りが一周して逆に冷静になったのか、頭が痛そうにこめかみを人差し指でおさえながらぶつぶつ言い出した。

「信じられない。信じられせんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

断言してやろう、無い！

「で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者の、その候補生としての選出されるエリートのことですわ。……あなた、単語から想像したらわかるでしょう」

「そついわれればそつだ」

「そう！ エリートなのですわ！」

びしつと俺と一夏に向けた人差し指が、鼻に当たりそうなくらい近かった。

へし折っちまうぞ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「「そうか。それはラッキーだ」」

「……馬鹿にしていますの？」

少なくとも俺はお前を見下してる。

「大体、あなた方ISについて何も知らないくせに、よくこの学校に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はズレですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

「……………」

コイツの頭の中はお花畑ですか？

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

ほお、この態度が優しさなのか。はじめて知ったぜ。

「ISのことかわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよろしくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

なんか、物凄く唯一を強調された。

てか、コイツは知らないのか？

『それが男を抜いた結果だということ』を。

「入試って、あれか？ ISを動かして戦ってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？ 俺も倒したぞ、教官」

「……俺もだ」

「は……？」

やっぱりコイツは知らなかったらしいな。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

ピシッ。あ、何かいやな音が……。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……?」

「いや、知らないけど」

「あなた！ あなたも教官を倒したって言うの!？」

「ああ……」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん!？ たぶんってどういう意味かしら!？」

「えーと、落ち着けよ。な?」

「こ、これが落ち着いていられ——」

キンコンカーンコン。

話に割って入ったのは三時間目開始のチャイムだった。

「っ……！ またあとで来ますわ！ 逃げないことね！ よくって
!？」

よくない。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違って、山田先生ではなく千冬さんが教壇に立っている。よっぽど大事なことなのか、山田先生までノートを手に持っていた。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦にでる代表者を決めないといけないな」

ふと、思い出したように千冬さんが言う。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。面倒そうだな。やるやつはご苦労様だ……。

「はいっ。織斑くんを推薦します!」

一夏、頑張れ！。

「私は秋茜くんが良いと思います！」

……はっ？ 秋茜ってこのクラスに俺だけだぞ……。

「では、候補者は織斑一夏と秋茜天羽……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「「お、俺！？」」

つい立ち上がってしまう。そして視線の一斉射撃。
振り向かなくてもわかる、これは『彼ならきつとなんとかしてくれる』という無責任かつ勝手な期待を込めた眼差し。

「織斑、秋茜。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「織斑先生、僕は一夏くんを推薦します」

「ちよつ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも——」

まだ反論を続けようとした一夏を、突然甲高い声が遮った。

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

バンツと机を叩いて立ち上がったのは、あのセシリアなんかだ。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

この女、自分のが優れてると思い込んでやがるな。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

ほお……このクソ女は一度黙らせた方がいいかな。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！ 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

ブチッ！

「調子に乗るなよ三下ア！！ 流石に恩人の故郷を侮辱されて黙つて
と思うな？ それにオマエは言つたよなア、クラス代表はクラスの
のトップになるべきなんだつて。断言してやるよ、俺はオマエにな
んざ何一つ劣つちやいねエ！ クラスの、いや学園のトップはこの
俺だア！！」

「なっ……！？」

クラス中の視線が俺に集中していたが、今の俺にはそんなことはど
うでもいい。

「あつ、あつ、あなたねえ！ わたくしのことを侮辱しましたわね
！？ 決闘ですわ！」

バンツと机を叩くセシリア。

「ああ。いいぜエ。四の五の言うよりわかりやすいからなア」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
——いえ、奴隷にしますわよ」

「侮るンじゃネエよ。死んだってオメエなんかにゃ負けねエからよ」

「そう？ 何にせよちょうどいいですね。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

「ハンデくらいつけてやろうか？」

と、そこまで言ってクラスからドツと爆笑が巻き起こった。

「あ、秋茜くん、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「秋茜くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

全員本気で笑っている。

「ハンデいらねエのな？」

「むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いなんて、ジョークセンスがあるのね」

さっきまでの激昂はどこへやら、セシリアは明らかな嘲笑をその顔に浮かべていた。

「ねー、秋茜くん。今からでも遅くないよ？ セシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

ちょうど一夏の斜め後ろの女子が気さくに話しかけてきた。けれど、その表情は苦笑と失笑の混じったものだった。

「俺を甘く見るなよ？」

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。秋茜とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

ぱんつと手を打って千冬さんが話を締める。

(……………)

俺は待機状態の混沌に触れ、気をなんとか落ち着かせていた。

(…………真面目に授業を聞こう)

俺は机の上の教科書を開き、授業に集中した。

第二話（後書き）

どうでしたか？

感想などありましたら
お願いします。

第三話（前書き）

二話目投稿です

（＊・ω・）γー

第三話

「うっ……」

放課後、一夏は机の上でぐったりとうなだれていた。

まあ、俺には関係ないから良いんだが……。

他学年・他クラスから女子達が押しかけ、きゃいきゃいと小声で話し合っている

(……勘弁してくれ)

昼休みも、こんな感じだった。俺と一夏が学食に移動するとゾロゾロと全員ついてくる。大名行列かよ……。

「ああ、織斑くんに秋茜くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

「……？」

呼ばれて顔を上げると、副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言つて部屋番号の書かれた紙とキーをよこす山田先生。

「俺たちの部屋、決まってるじゃないじゃなかったですか？ 前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらつて話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。……織斑くんと秋茜くん、そのあたりのことつて政府から聞いてます？」

最後は俺と一夏にだけ聞こえるように耳打ちしてきた。
ちなみに、政府つて言うのはもちろん日本政府。

「そう言うわけで、政府特命もあつて、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

「わかりました」

「……あの、山田先生、耳に息がかかってくすぐったいんですが……」

「あつ、いやつ、これはそのつ、別にわざととかではなくてですね
っ……！」

「山田先生、生活必需品を買いに一回行っていいですか？」

俺は、山田先生にそう言い教室の出口の方に行くと、そこには千冬さんがいた。

「秋茜の荷物は私が買ってお前の寮に送っておいた。それと織斑の方は、私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

「織斑先生。なんかすいません、ありがとうございます」

千冬さん、ホントありがとうございます。

「ど、どうもありがとうございます……」

「まあ、生活必需品だけだな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

そういえばさっき、俺の分は千冬さんが買ったって言ってたけど……
…それって下着とかもだよ、な？

……………恥ずいな……………。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、織斑さんと秋茜くんは今のところ

使えません」

普通考えて無理だよな。

「え、なんでですか？」

「アホかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

「僕は千冬さんと一緒に入りたいです」

パンツ！

千冬さんにおもいつきり出席簿で叩かれた。

頭痛いよお……。

「織斑先生と呼べ馬鹿者。それと私はお前と風呂に入る気はない」

千冬さん酷いです……。
ぐすつ……。。

「……えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これで。織斑くんと秋茜、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃダメですよ」
道草なんかしねえっす。

「えーと、ここか。1027室」

俺は部屋番号を確認して、ドアに鍵を差し込む。

カチャ。

部屋に入ると、まず目に入ったのは大きめのベッド。それが二つ並んでいる。

そして、さっき千冬さんが言っていた荷物もちゃんとあった。

俺は一通り部屋を見終わったり、シャワーを浴びた後、時計を見ると六時丁度になっていた。

（飯でも食いに行くか……）

俺は部屋を出て、食堂に向かった。

後ろには女子が集団でついてきていた……。

俺はさっさと食券をだして、ランチを受け取り。適当な席に着いた。
すると後ろの方から声をかけられた。

「あ、秋茜くん。一緒に食べていい？」

別に断る理由も特に無いから、とりあえず頷いておいた。

すると、我先にと「私も一緒に良い？」と聞いてきた。

あー、なんかもう面倒だな。

「別に良いけど、質問するんだったら、最初に来た娘だけで頼む」

「「「はい」」」

「あ、秋茜くん。いきなりだけど彼女っている？」

俺は口に入れている物を飲み込み、質問に応える。

「彼女なんかいないよ」

「ほ、本当に？」

「ああ……」

「……（私たちにもチャンスはある！）」「」

もぐもぐ。

「秋茜くんは、どんな人が好みなのかなあ？」

ごつくん。

……好みか。

「千冬さんみたいな人、かな」

「……（しょぼーん）」「」

あ、食い終わっちまったし、部屋戻って寝るかな。

俺は食器を片付け始める。

「あ、秋茜くん。最後に質問いい？」

「部屋番号っていくつ？」

その質問に俺は耳打ちで返答した。

「……誰にも言わないなら教えてやるよ」

「……はい、言いません／＼」

この娘、耳まで真っ赤なんだけど。

「クスクス。じゃあ教えてあげる、1027だよ。…それじゃあ」

俺はそう言っ て食堂を出ていった。

「はあ……」

俺は自室のベッドに寝そべりながら、溜め息をもらし。
時間は丁度、夜の九時になったところだった。

（寝るか…）

俺は寝るために電気を消すと、控えめな声とともに、誰かが扉をノックした。

「え、えつと。泉^{いずみ} 沙耶^{さや}です。あ、秋茜^{あき}くん。起きてる？」

この声はさっきの娘だ。

「入って来ていいよ」

俺がそう言つと、泉はおどおどしながら部屋に入つて来た。

「お、お邪魔します」

泉は此处に来る前、風呂に入っていたらしく。髪は少しだけ濡れていて、クマ柄のパジャマに着替えていた。

「とりあえず座って待ってて、飲み物持ってくるから」

「あ、ありがとう／＼」

「どういたしまして」

俺は冷蔵庫から飲み物を適当に取り出し。テーブルに置いた。

「はい。……ところで何か俺に用があつて来たんじゃないの？」

「え、えつとね。特にないんだ」

「そか。まあ、ゆっくりしていくといいよ。他の部屋とたいして変わらないと思うけどさ」

「う、うん。ありがとう秋茜／＼」

俺は11時ぐらいまで泉と話をしていた。

第三話（後書き）

感想などありましたら
お願いします。

第四話（前書き）

第四話投稿。

セシリア戦です

主人公のチート機体がかが

第四話

もぐもぐもぐ。

今は入学式翌日の朝七時半。一年生寮の食堂だ。相変わらず右を見ても左を見ても女子。職員まで全員女性。
当然といえば当然だが、ぶっちゃけるとどうでもいい。

ちなみに俺のメニューは食パン一枚とブラックコーヒー。

昨日同様、俺の周りでは女子が何かを言っていた。

「ねえねえ、彼が噂の男子だった〜」

「あら、かつこいいじゃない」

はあ……。

俺は冷めきっているコーヒーを一気に飲み干し、席を立って食堂を出て教室に向かった。

「あゝっ、早く声をかけておけばよかった……」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

後ろの方では女子たちの声が聞こえた。

side 織斑一夏

二時間目が終わった時点で、俺は早くもグロッキーだった。

(まずい……)

ダメだ。単語は予習のおかげである程度はわかるが、根本的に理解不能な箇所がある。

何度やっても解けない数学の問題みたいだ。そう、式を知らないと解けないタイプの。

「……………」

しかし、こうなってくるとなおさら不思議だ。初めてISに触れた時のあの懐かしい感じ。まるで何年も前から知っていたかのような、そんな感覚。

けれど、こうして教科書を読むと、本当に俺がISを動かしたのかと疑いたくなるくらいに理解できない。

(うーん……)

俺が腕を組んで教科書とにらみ合いを続けている途中でも、当然授業は進んでいく。山田先生は時々詰まりながらも、生徒たちにISの基本知識を教えていた。

「というわけで、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生態機能を補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ――」

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども……」

クラスメイトの一人がやや不安げな面持ちで尋ねる。確かに、あのISを動かしたときの独特の一体感は、人によっては不安を感じさせるのかもしれない。

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言うことはないわけです。もちろん、自分にあったサイズのものを選ばないと、型崩れしてしまいますが――」

……ふと、俺と目が合う。そこで一回きよとした山田先生は、数秒置いてからボツと赤くなった。

「え、えつと、いや、その、お、織斑君と秋茜君はしていませんよね。わ、わからないですね、この例え。あは、あははは……」

その山田先生のごまかし笑いはなんとなく教室中に微妙な雰囲気を漂わせた。

「んんっ！ 山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

浮わついた空気を咳払いでシャットアウト。千冬姉に促されて、山田先生は教科書を落としそうになりながら話の続きに戻った。

「そ、それともう一つ大事なことは、ISにも意識に似たようなも

のがあり、お互いの話——つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、IS側も操縦者の特性を理解しようします」

なるほど。練習は裏切らないというやつだな。

「それによつて相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ISは道具ではなく、あくまでパートナーと認識してください」

すかさず、女子が拳手をする。

「先生ー、それって彼氏彼女のような感じですかー？」

「そつ、それは、その……どうでしょう。私には経験がないのでわかりませんが……」

経験というのはもちろん男女交際のことだろう。赤面してうつむく山田先生を尻目に、クラスの女子はきやいきやいと男女についての雑談をはじめている。

「……………」

「な、なんですか？ 山田先生」

「あつ、い、いえつ。何でもないですよ」

訊かれて、両手を振ってお茶を濁す山田先生。なにかじろじろ見られていた気がするが……って、そりゃ昨日からずっとそうか。

キンコンカンコン

「あつ。えっと、次の時間では空中におけるISの基本動作をやりますからね」

ここISの学園では実技と特別科目以外は基本担任が全部の授業を持つらしい。休み時間十五分のためにいちいち職員室まで戻らないといけない先生たちは、なんというかご苦労様だった。

「ねえねえ、織斑くんさあ！」

「はいはい、質問しつもん！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

昨日の様子見は終わりを告げたのか、山田先生と千冬姉が教室を出るなり女子の半数がスタートダッシュ、俺と天羽の席に詰めかける。今『もう出遅れるわけにはいかないわ！』とか聞こえたのは、錯覚

じゃないんだろ？……。

「いや、一度に訊かれても――」

困るんだが。と続けようとして、なにやら整理券を配っている女子を見つめる。しかも有料。商売をするな、商売を。

「……………」

俺を囲む集団を少し離れた位置で見ているのは、幼馴染みこと^{ほつぎ}箒だ。相変わらず怒っているようにみえるが、そろそろ指摘するのはやめよう。人は学習する生き物だ。

（しかし参った。箒にISのことを教えてもらおうと思ったんだが……こりゃ夜に訊くしかないな）

そう思っている間も女子の早く質問に答えて視線が非常にづらい。どれから答えたらいいのやら。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの！？」

「え。案外だらしな――」

パンツ！

「休み時間は終りだ。散れ」

おお、いつの間に背後に。しかもこのタイミングの叩きはあれか。個人情報ばらそうとしたからだろうか。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ」

「????」

俺がちんぷんかんぷんでいると、教室中がざわめいた。

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に!？」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで……」

「ああ。いいなあ……。私も早く専用機欲しいなあ」

どういうことだろうか。何がそんなにうらやましいのか。
まったく意味がわからないという顔をしていると、見るに堪えかね
たという感じで千冬姉が溜め息混じりにつぶやく。

「秋茜、教科書六ページを音読してやれ」

「はい」

天羽は教科書を開かずに音読しはじめた。

「えつと『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているIS
ですが、その中心たるコアを作る技術は一切開示されていません。
現在世界中にあるIS467機、そのすべてのコアは篠ノ之博士が^{レオノ}
作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、
未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコア
を一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・機関では、
それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行なっ
ています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、
すべての状況下で禁止されています』……」

「つまりそういうことだ。本来なら、IS専用機は国家あるいは企
業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況
なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。
理解できたか？」

「な、なんとなく……」

えーと、整理しよう。

- 1・ISは世界に467機しか存在しない。
- 2・コアは篠ノ之博士以外作れない。
- 3・俺が特別待遇。ただし実験体。

ということか。うん、よくわかった。ちなみに篠ノ之博士というのは――

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

女子の一人がおずおずと千冬姉に質問する。……まあ、篠ノ之なんて名字、そうそうないしいつかはバレるよな。

――篠ノ之^{たばね}束。ISをたったひとりで作成、完成させた稀代の天才。千冬姉の同級生で、筈の実姉だ。俺も何度也会ったことがあるが、なんというか、『天才』だ。

月曜。セシリアとの対決の日。

第三アリーナ・Aピットで俺はブラックコーヒーを飲んでいる。
すると千冬さんが俺に話しかけてきた。

「秋茜、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな」

「はい。……千冬さ——織斑先生、こんなことになってしまいましたせん」

「まったくだ、馬鹿者。早く準備をして行け」

「はい！」

俺は自分の専用機『混沌』を展開し、ゲートの方に向かった。

ゲート解放まであと二・〇五七―八四二二秒——『敵』がそこにいる。

「あら、逃げずに来ましたのね……なっ、なんですのそのISは！
？」

セシリアは俺のISを見て驚いた。
俺は自分の周りを360度全方位を見渡す、すると他の女子たちもセシリアと同じように驚いている。

それもその筈だ、俺の専用機『混沌』は、ほとんど普通の鎧と変わらない大きさでフルスキンなのだから。
『混沌』のカラーは漆黒で光を反射すらない。
背中には羽を模したスラスタが付いている。

「企業秘密だ、知りたかったら俺に勝ってみな」

俺は鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』を展開しているセシリアにそう言った。

「さあ、楽しい楽しいゲームの始まりだ」

「そうですね。それなら——」

——敵IS射撃体制に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

キューインツ！ 耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光は秋茜に当たりシールドエネルギーを減らす。

そう、本来ならばその筈だった。

刹那、セシリアが手に持っていた《スターライトmk?》が爆発した。

秋茜に直撃したエネルギー弾が跳ね返った。それはまるでビデオの巻き戻しのように――。

「この試合、オルコットは万に一つとして勝てない」

「織斑先生、あの機体はいったい何なんですか？」

山田先生は織斑先生に秋茜の機体がどういった物なのかを聞いた。

「秋茜の機体は第一世代型IS『混沌』だ。攻撃力、スピードは普通のISと変わらないが、エネルギー消費量は通常のISの半分。

能力名は一方通行。^{アクセラレーター}運動量・熱量・光・電気量etcといったあらゆるベクトル（向き）を観測し、触れただけで変換する能力。普段は「反射（ベクトルの反転）」に設定しており、ありとあらゆる攻撃を自動的に跳ね返す。能動的な能力としても優秀で、鉄柱飛ばし・機体運動増幅・風向操作によるM7クラスの暴風、竜巻・高電離気体・再生促進・自転操作・レールガン以上の速度の石礫……など応用は多数。私でも手におえない、化け物だよ。」

「な、なな、なんでそんなISが存在するんですか！？ 今すぐ止めさせるべきです！」

山田先生は秋茜のISの説明を聞いた瞬間。この試合を止めさせるよう、織斑先生に言うが。織斑先生は――

「このままやらせる」

そのまま続けさせる。

「こんなもンなんですかア？ 入試主席の実力っていうのは、ああ！」

「……………」

俺はフィン状のパーツに直接特殊（BT）レーザーの銃口が間いている兵器『ブルー・ティアーズ』の銃撃をことごとく反射していく。

セシリアは俺から一定の距離をとり、ブルー・ティアーズ（以下ビット）で攻撃を仕掛けてくる。

だが俺は一番最初に破壊した、スターライトmk？の一部を見つけ、それをビット目掛けて蹴り飛ばした。スターライトmk？を蹴るときはベクトルの向きを変え、超電磁砲^{レールガン}以上の速さ・威力でビットにぶつかる。

ビットはボンッ！と音をたて粉々になる。

俺は同じ要領でビットを粉々にしていく。

「……………」

セシリアが気づいた時には全てのビットは粉々に碎け散っていた。

「ふぁーあ……………」

俺はそろそろ戦闘も飽きてきて。降参宣言をしようとしたとき、恐れていたことが起きた。

戦闘、破壊、殺人衝動が俺の意識をブラックアウトさせ――

「……………」

side 織斑千冬

これは、オルコットがまずい！

「織斑！ 今すぐオルコットの助けに入れ！ このままだとオルコットも秋茜も死ぬ！」

「い、いったい、どういうことだよ千冬姉っ！」

「話は後だ！」

「わ、わかった」

秋茜、オルコット。もう少し持ちこたえろ。

side OUT

秋茜の動きが一瞬止まり、次の瞬間には今までの雰囲気が一変し禍々しい気配を纏っていた。

秋茜は無言でセシリアに近づいて行く。

「な、なんですよ!？」

セシリアは戸惑いながらも秋茜から離れた。

だが、秋茜は『イクニッション・ブースト瞬時加速』を作動させ、更に機体にかかるはずのベクトルを変更、爆発的な加速をし。

セシリアが気付いた時には、上段回し蹴りをくらって地面に叩きつけられていた。

「……………っ!」

今の一撃でブルー・ティアーズのシールドエネルギーは半分以上もつてかれ、残りが200を切っていた。

だが秋茜の攻撃の手は一切弱まる気配がなく、ブルー・ティアーズのシールドエネルギーはとうとう10を切った。

そこに『白式』を展開している一夏がセシリアを助け出した。
だがセシリア本人にもダメージが与えられていたらしく、一夏に助けられてすぐに意識を失った。

「……………」

秋茜は無言のまま、白式に襲いかかろうとする。

ガキンッ！ と金属どうしのぶつかる音が響く。

織斑千冬が近接武器を片手に秋茜の動きを止めていた。

「……………」

「秋茜、大丈夫だ。私はここにいる、だから落ち着け」

千冬は手に持っていた近接武器を手放し、秋茜を抱きしめた。
すると秋茜が展開していたIS『混沌』は待機状態に戻り、秋茜は
気を失っていた。

「まったく、世話が焼ける馬鹿者だ」

千冬はそう言いながらも、秋茜の頭を優しく撫でていた。

S i d e 織斑一夏

翌朝、朝のSHR。あり得ないことが起きていた。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

山田先生は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がっている。暗い顔をしているのは俺と天羽だけだった。

「先生、質問です」

拳手。質問は手を挙げてしよう。基本だ。

「はい、織斑くん」

「俺は、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

「それは――」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

がたんと立ち上がり、腰に手を当てるポーズが様になっていが、いやもう正直それはいいや。――ていうかなんで辞退したんだ？ しかも、なんか妙にテンションが高いというか……ああ、いや、こいつはいつもそうか……いやでも何だ？ 昨日までの怒ってる感じもないし、むしろ上機嫌に見えるんだが――なんで？

「それで、まあ、いろいろ考えて、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が何よりの糧。クラス代表ともなれば戦いには事欠きませんもの。それに天羽さんにも同意をとってありますわ」

「いやあ、セシリアわかってるね！」

「そうだよねー！ せっかく世界で二人しかいない男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとねー」

「私たちは貴重な体験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。

一粒で二度おいしいね、織斑くんは」

だから商売にするなっつーの。というかクラスメイトを売るな。

「そ、それですわね」

コホンと咳払いして、顎に手を当てるセシリア。いつもと違うポーズなのは何か意味があるのだろうか。あるような気がする。それが何かはわからないが。

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはもうみるみるうちに成長を遂げ――」

バン！ 机を叩く音が響く。立ち上がったのは箒だった。

「あいにくだが、一夏の教官は足りている。私が、直接頼まれたかな」

な、なんだなんだ？ 『私が』を特別強調した箒は、異様に殺気立っている瞳でセシリアを睨んだ。

（って、そんな目で見たらまた相手がビビるだろうが）

——けれどどうしたことが、先週は怯んだセシリアも、今日は違った。正面から受け止めて、視線を返している。それどころかちょっと誇らしげだ。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら？」

「ら、ランクは関係ない！ 頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしても懇願するからだ」

してねえ！。

「え、箒ってランクCなのか……？」

「だ、だからランクは関係ないと言っている！」

怒鳴られた。ちなみに俺はBで、天羽がSらしい。といっても、これって確か訓練機で出した最初の格付けだから、あんまり意味はないって千冬姉が言ってたような——

「座れ、馬鹿ども」

すたすたと歩いていってセシリア、箒の頭をばしんと叩いた千冬姉

が低い声で告げる。

さすがは元日本代表にして第一回世界大会の覇者、凄味が違う。ふたりはすこすこと席に座った。凄味と、すこすこ……なんつって。バシン！

「その得意気な顔はなんだ。やめろ」

出席簿で叩かれた。千冬姉、知ってる？ 出席簿って表紙無茶苦茶硬いんだぜ。俺も今知ったんだけど。

「お前たちのランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣を付けようとするな」

さすがのセシリアも千冬姉に言われては反論の余地がないらしい。何か言いたそうな顔をしていたが、結局言葉を飲み込んだ。

「代表候補生でも一から勉強してもらうと前に言っただろう。くだらん揉め事は十代の特権だが、あいにく今は私の管轄時間だ。自重しろ」

うーん、千冬姉職場ではこんなにしっかりとしていたのか。かなり意外だった。塩味が足りないとぶつくさ言っていた人と同一人物とは思えない。

そつえば俺が寮で暮らすようになってから千冬姉はどうしてんの

かな。ていうか無人じゃないか？ 週末に一回見に帰らないとダメだな。ってそういえば千冬姉、洗濯ちゃんと自分でしてんのかな。ずっと俺にやらせてたけど。しかし、せめて下着くらいは自分でネットに入れてくれると助かる。中に埋もれていて、生地が傷んだら怒るのは千冬姉なんだし。それくらいは自主的にやってくれよ二十四歳社会人。

バシン！

「……お前、今何か無礼なことを考えていただろう」
「そんなことはまったくありません」

「ほう」

バシンバシン！

「すみませんでした」

「わかればいい」

こうして善良な市民は暴力に屈するのか。なんという理不尽。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいと（俺を除く）クラス全員一丸となって返事をした。団結はいいことだ。

ただ、俺にとってもいいことであればよかったなと思う。心から思う。

天羽は腹を抱え苦しそうに笑っているところを千冬姉に叩かれ、頭をおさえていた。

第四話（後書き）

感想などありましたら

お願いします

第五話（前書き）

皆さまのおかげで

PV：28，301アクセス

ユニーク：4，133人

お気に入り：61人

になりました♪

本当にありがとうございますm（ ）（ ）m

では 第五話投稿です。

第五話

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦をしてもらう。織斑、秋茜、オルコット。試しに飛んでみせろ」

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちょうど全部なくなった頃。俺は今日もこうして千冬さんの授業を受けていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

せかされてISを展開する。

約0・3秒の展開時間。

ISは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリ
Iの形状で待機している。俺は左中指のアーマリング。セシリア
は左耳のイヤークラス。一夏は右腕のガントレット。……一夏のは
アクセじゃなくて防具だな。

「集中しろ」

一夏は右腕を突き出し、ガントレットを左手で掴む。

約0・7秒でIS『白式』を展開。

同じくセシリアもIS『ブルー・ティアーズ』を装備して浮かんでいる。俺との対戦で損傷したビットは、完全に修復が終わっていた。

「よし、飛べ」

言われて、俺とセシリアの行動は早かった。急上昇し、一夏の遙か頭上で制止する。

一夏も遅れて後に続くが、その上昇速度はセシリアよりかなり遅いものだった。

「一夏、早くしないと織斑先生に怒られちゃうぞ？」

「何をやっている。スペック上の出力では白式の方が上だぞ」

俺が一夏にそう言つと千冬さんから一夏にお叱りの言葉が。

ちなみに急上昇、急降下は昨日習ったばかりだ。

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ、なんで浮いてるんだ、これ」

「一夏、説明してもいいが、長いぞ？」

「わかった。説明はしてくれなくていい」

すぐ断ったな。まあ絶対に一夏じゃ理解するのに時間がかかるからな。

「秋茜、織斑、オルコット、急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「わかりました」

「了解です。では一夏さん、お先に」

俺とセシリアは急降下と完全停止を難なくクリアした。

一夏もそれに続き急降下をした。

ギョーンツ——ズドオオンツ！！！！

ふ、ふは、ふははははははは！
や、ヤベッ！

つぼった、は、腹いてエよ！

一夏、地上には着いたけど、それは墜落って言うんだぜ？ 知ってるか？

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

姿勢制御をして上昇、地面から離れる一夏。ISのシールドバリアのおかげで白式には汚れ一つない。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

「篠ノ之、アレは教えたとは言わないからな？」

俺が篠ノ之にそう言うと、篠ノ之は俺を睨み付けてきた。

「大丈夫ですか、一夏さん？ お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

篠ノ之はくわつと、一夏とセシリアの方に顔を向けた。
おー怖い怖い。

「……ISを装備していて怪我をするわけがないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを
装備していても、ですわ。常識でしょ？」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

バチバチッ。ふたりの視線がぶつかって火花を散らした。いや、実
際に火花は出てないぞ？

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっている」

箒とセシリアの頭をぐいーと押しのけて、千冬さんが織斑の前に
立つ。

「織斑、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになった
だろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。ではじめる」

.....。

一夏、遅いぞ。

「遅い。0・五秒で出せるようになれ」

厳しいな千冬さん。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

一夏、自業自得だからな？
俺は手伝わないぞ。

「というわけでっ！ 織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

ぱん、ぱんぱーん。クラッカーが乱射される。

今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。

各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっている。

「……………」

なんで俺までここにいるんだよ。

帰って良いよな？ 良いんだよな？

だって今日の主役は一夏であって、俺ではないんだから。

そう思った俺の行動は早かった。

手に持っていたコップをテーブルに置き、バレないように食堂から出ていき自室に戻った。

「はぁ……」

自室に着いた俺は、すぐにベッドに寝ころがる。

暇だなぁ……。

そついや、冷蔵庫の中にビールかなんか入ってたな……。飲んだら寝るか。

「未成年が何を飲もうとしているか、馬鹿者」

「うわっ！？　びっくりした！」

ホントにびっくりした。

「千冬さん、なんでここにいますか？」

「いや、アルコールの香りがしたから……。私の分は出さないのか？」

「……飲むんですか？」

「早くしろ」

「……わかりました」

俺はさっさと冷蔵庫からビールを取り出し、千冬さんの前に置く。

「千冬さん、なんか俺に用があつて来たんじゃないんですか？」

「ぐくぐくぐく」

「えっと、千冬さん。聞いてますか？」

「ぐくぐく。……天羽、一夏を見てどう思った？」

「一夏、ですか？」

「ああ」

「うーん。言っちゃうと、無駄が多すぎで。恋愛とかに疎い、唐変木ですかね？」

「そうか」

「でも、心は凄く強そうなので、これから化けますよアイツ」

「お前が言うなら間違いはないな。私はこれで失礼するが、天羽あんまり遅くまで起きてるんじゃないぞ」

「はい」

「遅刻したらグラウンド十周させるからな」

千冬さんは俺にそう言って部屋を出ていった。

「秋茜くん、おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝。席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。

「転校生？　こんな時期に？」

今はまだ四月だ。なんで入学じゃなくて、転入なんだ？
しかもこのIS学園、転入はかなり条件が厳しかったはずだ。

「うん、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「へー、どんなやつなんだろうな」

代表候補生っていうからには強いんだろうな……。

「——その情報、古いよ」

ん？ 教室の入り口からふと声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で
きないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわ
け」

ふつと小さく笑みを漏らす。トレードマークのツインテールが軽く
左右に揺れた。

……すげえ嫌いなタイプだ。

「何格好付けてるんだ？ すげえ似合わないぞ？」

「んなつ……！？ なんてこと言うのよ、アンタは！」

こいつ、一夏の知り合いか……。

「おい」

「なによ!?!」

あちゃ。その人にそんな言い方したら――

バシンッ！ 鳳鈴音に強烈な出席簿打撃が入った。

――千冬さんの登場。

（まあ、どうでもいいや）

俺は音楽を聴きながら、ぼーっとした。

第五話（後書き）

感想などありましたら

お願いします。

第六話（前書き）

皆さまのおかげで

P V : 4 1 , 2 7 8 アクセス
ユニーク : 5 , 8 6 7 人

になりました♪

本当にありがとうございます
、・・・、

第六話

s i d e 織斑一夏

五月。

あれから一週間たった今も鈴の機嫌は直らない。それどころか日増しに悪くなっている。

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」

放課後、かすかに空が橙色に染まりはじめるのを眺めながら、今日もまた特訓のため第三アリーナへと向かう。

メンツは俺、天羽、箒、セシリアだ。

「IS操縦もようやく様になってきたな。今度こそ――」

「まあ、わたくしが訓練に付き合っているんですもの。このくらいはできて当然、できない方が不自然というものですわ」

「ふん。中距離射撃型の戦闘法が役に立つものか。第一、一夏のISには射撃装備がない」

「あー、はいはい。喧嘩はしない」

言葉を中断されたせいか、やや棘のある言葉で告げる箒を天羽がなだめる。

箒が言った通り、俺のIS・白式には射撃装備が一切ない。雪片式型だけ。だけだ。

普通、ISというのは機体ごとに専用装備を持っているものらしい。しかし、その『初期装備』だけでは不十分なので、『後付装備』というものがある。セシリアのISでは初期装備はブルー・ティアーズ。後付装備はライフルと近接ナイフという感じた。

そして、ISというのはこの後付装備のために『拡張領域』がもうけられている。装備できる量は各機のスペックによるが、最低でも二つは後付けできるようになっているのが一般的なIS……らしいらしいというのは、どうも俺のISはそうではないからだ。拡張領域ゼロ。しかも初期装備は書き換えられないので、近接ブレード一本というのが今のところの俺のISのスペックだ。

「それを言うなら篠ノ之さんの剣術訓練だって同じでしょう。ISをしようしない訓練なんて、時間の無駄ですわ」

「な、何を言うか！ 剣の道はすなわち見という言葉を知らぬのか。見とはすべての基本において――」

「喧嘩をするな……」

「天羽さん、すいません。一夏さん、今日は昨日の無反動旋回のおさらいからはじめましょう」

「ええい、この——聞け、一夏！」

「俺は聞いてるって！」

というかなんで俺が怒られてるんだ！

何か不条理なものを感じつつ、俺は第三アリーナのAピットのドアセンサーに触れる。指紋・静脈認証によって解放許可が下りると、ドアはバシユツと音を立てて開いた。いつ聞いてもこの圧縮空気の抜ける音は格好いいな。

「待ってたわよ、一夏！」

ピットにいたのは、なんと鈴だった。

腕組みをしてふふんと不適な笑みを浮かべている。

俺の後ろ幕とセシリアが顔をしかめている気配がする。天羽は溜め息をはいてるし。

「貴様、どうやってここに——」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ」

「あたしは関係者よ。一夏関係者。だから問題なしね」

そりゃまあそうだが、なんか違うんじゃないか？

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな……」

「盗つ人猛々しいとはこのことですわね！」

「はあ……」

うわ、セシリアまで切れた。しかし、箒のぴくぴくと引きつった口元が非常に恐ろしい。

心臓の弱い人はご注意下さい。人間凶器が近くにいます。

「……おかしなことを考えているだろう、一夏」

「いえ、なにも。人斬り包丁に対する警報を発令しただけです」

「お、お前というやつはっ——」

俺に掴みかかってくる箒を、天羽が間に入って邪魔をする。

「今はあたしの出番。あたしが主役なの。脇役はすっこんでてよ」

「わ、脇やつ——!？」

「……………」

あつ、天羽も切れかけてるんだが……。
笑顔が引きつってる。

「はいはい、話が進まないから後でね。……で、一夏。反省した？」

「へ？ なにが？」

「だ、か、らっ！ あたしを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうか！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ……じゃあなに、女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ!？」

「おう」

そりゃそうだろう。放っておいて欲しいんなら、放っておいてやるのがいいだろ。

「なんか変か？」

「変かって……ああ、もうっ！」

焦れたように声を荒げて、頭をかく鈴。

「謝りなさいよ！」

そのあまりに一方的な要求には、俺もうんとは言えない。別に頭を下げることに何の躊躇もないが、自分が納得いかないまま謝罪するのはお断りだ。

「だから、なんでだよ！ 約束覚えてただろうが！」
「あっきた。まだそんな寝言いつてんの！？ 約束の意味が違うのよ、意味が！」

意味が？ 豚を使った沖縄料理か？ それはミミガー。

「くだらないこと考えてるでしょ！？」

うわ、ばれた。さすがは筭に続く幼なじみ。俺の観察は慣れているようだ。

「あったまきた。どうあっても謝らないっていう訳ね！？」

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが！」

だから何がだよ。まったく意味がわからん。

「じゃあこうしましょう！ 来週のクラス対抗戦、それで勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね！？」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらっからな！」

売り言葉に買い言葉。それは返却制度のない物々交換。それに一度買った以上、男がそう簡単に前言撤回できるか。情けないにもほどがある。

「せ、説明は、その……」

なぜだか、俺を指さしたままのポーズでボツと鈴が赤くなる。なんだ？ そんなに屈辱的なことなのか、怒ってる理由を説明するといふのは。

「なんだ？ やめるならやめてもいいぞ？」

一応これは親切心で言ったんだが、鈴には逆効果だった。

「誰がやめるのよ！ あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！ この朴念仁！ 間抜け！ アホ！ 馬鹿はアンタよ！」

むかつ。

「うるさい、貧乳、ペチャパイ、無い乳、まな板」

——あ。やばい。

ドガアアンツ！！！！

いきなりの爆発音、そして衝撃で部屋全体がかすかに揺れた。見ると、鈴の右腕はその指先から肩までがIS装甲化していた。

思いつきり壁を殴ったような——けれど、拳には全く届いていない——そんな衝撃だった。

「い、言ったわね……。言ってはならないことを、言ったわね！」

ぴじじつとISアーマーに紫電が走る。

——これは、まずい。本気で、怒っている。

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』！？ 今の『も』よ！ いつだってアンタが悪いのよ！ ちよつとは手加減してあげようかと思っただけど、どうやら死にたいらしいわね……。いいわよ、希望通りにしてあげる。——全力で、叩きのめしてあげる」

最後に、今まで見たことのない鋭い視線を俺に送ってから、鈴はピットを出ていった。

ぱしゅん……と閉まったドアの音まで、なんだかおびえてるように聞こえる。

ちらりと壁を見ると、直径三十センチほどのクレーターが出来ていた。特殊合金製の壁をへこますくらいの威力は、どう考えてもあるのだろう。

「……パワータイプだな。それもオマエと同じ、近接格闘型……」

少し真剣な眼差しで壁の破壊痕を見つめる天羽だったが、俺はそんなことよりもここ数年で一番の後悔をしていた。

（よりもよって胸のことを言ってしまうとは……）

鈴が一番気にしている、真剣に怒るポイントだ。さっきのは圧倒的
かち絶体的に俺が悪い。

（参ったな……）

勝敗がどうであれ、鈴に謝らないといけないのは確定だった。

s i d e 秋茜天羽

「……………」

…………… やっちまった。

今日はクラス対抗戦当日。そう、当日なのだ……が、俺はまだ自室にいた。

「……………寝過ごした……………」

そう、俺は寝過ごしてしまったのだ。

枕元に置いてあるケータイを開いて見ると、千冬さんと山田先生からメールが十通づつ入っている。

……………。

「はぁ……………」

俺はさっさと制服に着替え、一夏が試合をしている、第二アリーナへと向かう。

『よくかわすじゃない。衝撃砲《龍咆》は砲身も砲弾も目に見えないのに』

俺は今、リアルタイムモニターで一夏と凰鈴音の試合を見ている。

ほー、一夏も特訓しただけのことはあるな。

代表候補生の攻撃を避けるだけの技術は身についたんだな。まあ、無駄が多いけど。

ズドオオオオンッ！！！！

「ん？」

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

これは凰鈴音の衝撃砲じゃないな。範囲も威力も桁違いだ。

リアルタイムモニターを見ると、ステージ中央からはもくもくと煙が上がっている。どうやらさっきのは『それら』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃波らしい。

アリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている。それを貫通するだけの威力を持った何かがステージに乱入。

うーん、一夏と凰鈴音で何とかなるか？

まあ、とりあえず千冬さんに連絡してみるか。

「あ、もしもし」

「秋茜か」

「はい。えっと、これからの指示をだしてもらいたんですけど、大丈夫ですか？」

「とりあえずピットに來い、話はそれからだ」

「わかりました」

俺は千冬さんとの通話を終了して、ピットに向かう。
リアルタイムモニターに視線を一瞬间向けると、深い灰色をした異形のISが二体見えた。

「もしもし！？ 織斑くん聞いてます！？ 凰さんも！ 聞いてますー！？」

ISのプライベート・チャネルは声に出す必要は全くないのだが、そんなことを失念するくらい山田先生は焦っていた。ついでに、俺はさっきピットに着いた。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「千冬さんに賛成」

「お、お、織斑先生！ 秋茜くん！ 何をのんきなことを言ってるんですか！？」

「まあまあ」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

「……………」

ぴたりとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を容器に戻す。

千冬さんにしては珍しい間違えだな。

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ……？ でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……」

「……………」

「あつ！ やっぱり弟さんのことが心配何ですね！？ だからそんなミス——」

「……………」

イヤな沈黙。うん、ホントにイヤな沈黙だ。

「あ、あのですねっ——」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「千冬さん、それは……」

「へ？ あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」
「どうぞ」

ずずいっと押しつけられるコーヒー（微塩）。山田先生は涙目でそれを受け取った。

「い、いただきます……」

「熱いので一気に飲むといい」

悪魔だ、悪魔がいる。

「先生！ わたくしにIS使用許可を！ すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、——」これを見る」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切り替える。その数値はこの第二アーリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル4に設定……？ しかも、扉がすべてロックされて——あのIS二機の仕業ですよ！？」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かうこともできないな」

実に落ち着いた調子で話す千冬さんだが、よく見るとその手は苛立ちを抑えきれないとばかりにせわしなく画面を叩いている。やっぱり、一夏のことが心配なんだろうな。

あー、後で怒られるんだろうな。
でも、しゃーないわ。

ちよつくら、パーティーに参加してくつか……。

一夏達も苦戦してるしな。

俺はピットをバレない様に抜け出し、アリーナに向かい走った。

おいおい、ここに穴が空いててアリーナに直通出来ますよっと。

「織斑一夏くん、凰鈴音さん、秋茜天羽くんの参上です。理解したか？」

俺はIS『混沌』を展開し一夏達にプライベート・チャネルをかける。

『天羽、来てくれたのか！』

「ああ。てか一夏と凰は休んでいいから」

俺はそう言い、プライベート・チャネルを切る。
そして敵IS二体（以下、敵A、B）と向き合う。

「さあ、ゲームの始まりだ」

俺は瞬時加速を使用し、敵Aとの距離を一気に縮める、すると横から敵Bのビーム砲撃が俺に向けられ放たれる。が、そのビーム砲撃は俺に触れた瞬間、ベクトルが反転し跳ね返る。
跳ね返ったビーム砲撃は敵Bに直撃した。

うーん、なんか物足りないな……。
トラップでも仕掛けるかな。

俺は近接武器『流星槍』を呼び出す。
流星槍は俺の後ろで浮遊しながらカーテンのように広がっていく。
その数、四四。

そのうちの二本を手にとり、残りをステルス・トラップとして敵A、Bの周りにセットした。これまでにかった時間、0・4秒。

俺は流星槍を構え、敵Bに突っ込む。
すると敵Bは俺から距離をとるが、背中には流星槍が三本突き刺さりIS装甲を破壊している。

「踊れ踊れえ！」

俺は左手に持つている流星槍を宙に浮かせ、それを敵Aに向かって蹴り飛ばす。その時、ベクトルを反転させ。レールガン以上の速さ、威力で敵Aの右肩に突き刺さる。

てか、アレはホントに人が乗ってんのか？ 動きがなんか変な感じがするんだが。

「おい！ 一夏、凰。アレに人が乗ってると思うか？」

「は？ 人が乗らなきゃISは動かな——」

とそこまで言って鈴の言葉が止まる。

「——そういえばアレ、あたしたちが会話してるときってあんまり攻撃して来なかったわね。まるで興味があるみたいに聞いているような……現に今も」

思い返すように凰が今までの戦闘を振り返る。

「うつん、でも無人機なんてあり得ない。ISは人が乗らないと絶

体に動かない。そういうものだもの」

俺もそれは知っている。

でも、あり得ないなんてことはあり得ない。

今最先端の研究でそれが不可能かどうかはわからないはずだ。なにせ、無人機が完成しても、そのことを黙っているだけでいいのだから。

「一夏、凰。ちょっとオマエ等もまざって、一体やつといてくれ」

「わかった」

俺は一夏達に敵Bの相手を任せた。

かりに無人機なら、ぶっ壊してもいいからな……手加減しなくてすむ。

ステルス・トラップを全て解除し、流星槍を俺の後ろで浮遊させ。俺は敵Aと少し距離をとり。

流星槍を次々蹴り飛ばしていく。

「オラオラ！ 避けないとどんどん突き刺さるぜ」

流星槍は敵Aに突き刺さっていき、装甲が剥がれていく。

うん。すげえ、針山みたいになってるよ。
きもちわりい……。

そろそろ終わらせるかな。

瞬時加速を使用。その時、負担するはずのベクトルを変更。

一気に敵Aに近づき、頭を踏みつぶす。

ズドオオオオンツ！ と音をたててぶっ倒れる。そして敵Aの腹部に突き刺さっている流星槍を引き抜き、再度同じ所に突き刺す。突き刺す時のベクトルを変更し、流星槍はすんなりと敵Aを貫通した。

うん。やっぱり槍は良いね。使ってて一番しっくりくる。
てか、どうしよっかな。

瞬時加速の名前（ベクトル変更ver）。

ポクポクポク、チーン。

イグニッション・バースト
瞬時爆速！

なんかわからんが、カッコイイからこれでいこう！

「一夏あつ！」

キーン……とハウリングが尾を引くその声は、篠ノ之のものだった。

中継室の方を見ると、審判とナレーターがのびていた。おそらくドアを開けたところに一撃食らったらしいな。当分目を覚まさないような倒れ方をしている。うわぁ……。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

大声。またキーンとハウリングが起こる。ハイパーセンサーで数十倍に拡大して篠ノ之を見ると、はぁはぁと肩で息をしている。一夏が心配で急いで駆けつけたんだろうな。

「……………」

気がつくと、敵Bは今の館内放送、その発信者に興味を持ったようだった。

「箒、逃げ――」

一夏は突撃態勢へと移行、瞬時に加速する。

「鈴、やれ！」

「わ、わかったわよ！」

両腕を下げ、肩を押し出すような格好で衝撃砲を構える凰。最大出力砲撃を行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がった。そして一夏は、その射線上に躍りでる。

なるほど、な。

「ちよつ、ちよつと馬鹿！ 何してんのよ！？ ときなさいよ！」

「いいから撃て！」

「で、でも」

「凰、いいから撃ってやれ！」

「ああもつつ……！ どうなっても知らないわよ！」

一夏は衝撃砲を背中には受け、『瞬時加速』を作動させる。
『瞬時加速』の原理はこうだ。後部スラスタ―翼からエネルギーを

放出、それを内部に一度取り込み、圧縮して放出する。その際に得られる慣性エネルギーを利用して爆発的に加速する。

それはつまり、外部からのエネルギーでもいいということだ。そして、『瞬時加速』の速度は使用するエネルギー量に比例する。

「——オオオッ！」

一夏の《雪片式型》が強く光を放ち。必殺の一撃は、敵Bの右腕を切り落とした。

しかし、その反撃で一夏は左拳をもろに受ける。

「「一夏っ！」」

「……狙いは？」

『「完璧だ！（ですわ！）」』

刹那、客席からブルー・ティアーズの四機同時狙撃と俺のバスターライフル《風鈴》が敵ISを撃ち抜く。

ボンッ！ と小さな爆発を起こし、敵Bは地上に落下する。

『ギリギリのタイミングでしたわ』

『天羽とセシリアならやれると思っていたさ』

一夏は確信じみた口調で答える。

「ふう。何にしてもこれで終わ——」

「一夏っ！ まだ終わっちゃいねえ！」

「！？」

片方だけ残った左腕。そりを、さらに最大出力形態に変形させた敵Bが地上から一夏を狙っていた。

次の瞬間、迫り来るビームに、一夏は、ためらいなく飛び込んでいった。

俺は自室のベッドに寝ころがっていた。

千冬さんの話によると、一夏は全身打撲だけですんだらしい。

……なんか食ったら寝るか。

s i d e O U T

学園の地下五十メートル。そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止したISはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。それから二時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ている。

「……………」

室内は薄暗く、ディスプレイの光で照らされた千冬の顔は、ひどく冷たいものだった。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みでウィンドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型端末を持った真耶が映っていた。

「どつぞ」

許可をもらってドアが開くと、真耶はいつもよりも幾分きびきびとした動作で入室した。

「あのISの解析結果が出ましたよ」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれは——無人機です」

世界中で開発が進むISの、そのまだ完成していない技術。遠隔操作と独立稼働。そのどちらか、あるいは両方の技術があのかのISに使われている。その事実、すぐさま学園関係者全員に箝口令が敷かれるほどだった。

「どのような方法で動いていたかは不明です。秋茜さんと織斑さんの攻撃に機能中枢が焼き切れていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった？」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか」

やはりな、と続ける。どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をする。

「何か心当たりがあるんですか？」

「いや、ない。今はまだ——な」

そう言っただけ千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かった。

かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

第六話（後書き）

感想などありましたら
お願いします。

第七話（前書き）

皆さんのおかげで

55000アクセス
突破です！

ありがとうございます

m (_ _) m

では 第七話投稿です

第七話

六月

「ねえ、聞いた？」

「聞いた聞いた！」

「え、何の話？」

「だから、あの織斑くんと秋茜くんの話よ」

「いい話？ 悪い話？」

「最上級にいい話」

「聞く！」

「まあまあ落ち着きなさい。いい？ 絶対これは女子にしか教えちゃダメよ？ 女の子だけの話なんだから。実はね、今月の学年別トナメントで——」

いつものことながら思春期女子で埋め尽くされた食堂はかましい。俺はまず奥の方で十数名がスクラムを組んでいる一団に気がついた。

「なんだ？ タロット占いでもしてんのか？」

それにしても今日の盛り上がり方はいつもよりさらに熱気を増して
いて、何かのたびにどよめきが起きる。

「えええっ！？ そ、それ、マジで！？」

「マジで！」

「うそー！ きゃー、どうしようー！」

何か面白いことでもやってんのか？ きゃあきゃあと黄色い声が津
波のように押し寄せてくる。

「あ——っ！ 秋茜くんだ！」

「えっ、うそ！？ どこ！？」

「ねえねえ、あの噂ってほんと——もがっ！」

例の一団の中で俺の存在に気づいた女子が雪崩れ込んでくる。――

あン？ 噂って何だ？ すぐに取り押さえられたけど、確かに今女子の一人がそう言ったような……。

「い、いや、なんでもないの。なんでもないのよ。あははは……」

「——バカ！ 秘密って言ったでしょうが！」

「いや、でも本人だし……」

一人が俺の前で大の字になって通せんぼ、その陰でなにやら二人が小声で喋っている。

「噂って？」

「う、うん！？ なんのことかな！？」

「ひ、人の噂も三六五日って言うよね！」

なげえよ。てか、それ一年だから。

「な、何言ってるのよミヨは！ 四十九日だってば！」

いやそれも違うだろ。っていうか——

「何か隠してるよな？」

「そんなことっ」

「あるわけっ」

「ないよ!？」

連携技を決めてから即撤退。この間わずか二秒。

……。

「はぁ………」

「しゃあねえ、今回は諦めるか。」

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？　そう？　ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラス中の女子がわいわいと賑やかに談笑していた。みんな手にカタログを持って、あれやこれやと意見を交換している。

「秋茜くん、秋茜くん、あゝきゝあゝかゝねゝくん。秋茜くんのISスーツってどのやつなの？ 見たことない型だけど」

「あー。俺のは、ガゼ社の特注品だよ。男のスーツがないから俺がデザインして作らせたんだ」

「ガゼ社って、あの？ 一着が何十万円なの？」

「うん」

ちなみにISスーツというのは文字通りIS展開時に体に着ている特殊なフィットスーツのこと。このスーツなしでもISを動かすこと自体は可能だが、反応速度がどうしても鈍ってしまう。確か……。

「ISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって、縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ISはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることができます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

すらすらと説明をしながら現れたのは山田先生だった。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。……って、や、山ちゃん？」

「山ぴー見直した！」

「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん。……って、や、山ぴー？」

入学から大体二ヶ月。山田先生には8つくらい愛称がつけられていた。慕われてる証拠だと思う。

「あー、教師をあだ名で呼ぶのはちょっと……」

「えー、いいじゃんいいじゃん」

「まーやんは真面目っ子だなあ」

「ま、まーやんって……」

「あれ？ マヤマヤの方が良かった？ マヤマヤ」

「そ、それもちょっと……」

「もー、じゃあ前のヤマヤに戻す？」

「あ、あれはやめてください！」

珍しく語尾を強くして山田先生が拒絶の意志を示す。

「と、とにかくですね。ちゃんと先生とつけてください。わかりましたか？ わかりましたね？」

はいとクラス中から変事があるが、ぶっちゃけ言ってるだけの返事なのは間違いなかった。

「諸君。おはよう」

「お、おはようございます！」

それまでざわざわしていた教室が一瞬で静かになった。一組担任織斑千冬先生の登場だ。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ下着で構わんだろう」

いや、構うだろう！ と、俺以外も絶対多くの女子は心の中で突っ込んだと思う。男が二人いるんだし、下着姿はまずいだろ。ちなみにIS学園の指定水着はスクール水着だ。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬さんが山田先生にバトンタッチする。ちょうど眼鏡を拭いていたらしく、慌ててかけ直す姿がわたわたりしている子犬のようだった。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！ しかも二名です！」

「……はっ？」

「え……」

「「「えええええっ！？」「」」

いきなりの転校生紹介にクラス中がいつきにざわつく。そりゃそう
だ。この三度の飯より噂好きの十代乙女、その情報網をかいぐぐっ
ていきなり転校生が現れたんだから驚きもする。しかもふたり。

（ていうか、なんでうちのクラスに？ 普通分散させるだろ）

そんな至極まっとうなことを考えていたら、教室のドアが開いた。

「失礼します」

「……………」

クラスに入ってきたふたりの転校生を見て、ざわめきがぴたりと止
まる

そりゃそうだ。

だってなあ、そのうちのひとりが——男子だったんだから。

第七話（後書き）

感想などありましたら

お願いします

第八話（前書き）

皆さまのおかげで

お気に入り件数が

100になりました♪

ありがとうございます

、
ω・
、

第八話

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

「お、男……？」

誰かがそつつぶやいた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

人なつっこそうな顔。礼儀の正しい立ち振舞いと中性的に整った顔立ち。髪は濃い金髪。黄金色のそれを首の後ろで丁寧に束ねている。体はともすれば華奢に思えるくらいスマートだ。

印象は、誇張じゃなく『貴公子』といった感じで、特に嫌味のない笑顔が眩しい。

「きゃ……」

「はい？」

「きゃあああああ——っ！」

ソニックウェーブというやつだろうか。クラスを中心にその
歓喜の叫びはあっという間に伝播する。

物凄くウザイ。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！ 守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった~~~~~！」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒くさそうに千冬さんがぼやく。仕事がというより、一いついつ十
代女子の反応が鬱陶しいんだろうな。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

もう一人の転校生は、見た目からしてかなりの異端だ。

輝くような銀髪。ともすれば白に近いそれを、腰近くまで長くおろしている。きれいではあるが整えている風はなく。ただ伸ばしっぱなしという印象のそれ。そして左目に眼帯。

印象は『軍人』。身長はシャルルと比べて明らかに小さいが、その全身から放つ鋭く冷たい殺気に近い気配がまるで同じ背丈であるかのように感じさせていた。

「……………」

当の本人は未だに口を開かない。

腕組みをした状態で教室の女子達を下らなそうに見ている。しかしそれもわずかのことで、今はもう視線をある一点……千冬さんにだけ向けていた。

「…………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

いきなり佇まいを直して素直に返事をする転校生——ラウラ。

千冬さんは面倒くさそうな顔をしている。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えるラウラはぴつと伸ばした手を体の真横につけ、足をかかとで合わせて背筋を伸ばしている。――どう見ても軍人だな、違っても軍施設関係者だ。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスメイト達の沈黙。続く言葉を待っているのだが、名前を口にしたらまた口を閉ざした。

「あ、あの、以上……ですか？」

「以上だ」

空気にいたたまれなくなつた山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに訊くが、返ってきたのは無慈悲な即答だけだった。

山田先生、すげえ泣きそうなんだけど。

「！ 貴様が――」

ん？ なんだ？ 一夏の方につかつか歩いていつてるけど……。

バシンッ！

うわぁ…… 無駄のない平手打ち。痛そうだな。

「……………」

「う？」

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

「いきなり何しやがる！」

「ふん……」

一夏の方に向かったとき同様すたと立ち去り、空いている席に座るラウラ。腕を組んで目を閉じ、微動だにしなくなる。

「あー……ゴホンゴホン！ ではHRを終わる。各人はすぐに着替

えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

HRを終わらせ、ぱんぱんと手を叩いて行動を促す千冬さん。

てか急がねえと女子が着替え始めちまうな。

「おい秋茜。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男子だろう。あとお前とデュノアを同じ部屋にしたからな」

「あ、はい。わかりました」

「君が秋茜君？ 初めまして。僕は――」

「自己紹介は後でいいから。とにかく今は移動が先だ。女子が着替え始めちまう」

説明すると同時に行動を移す。俺はシャルルの手を取るとそのまま教室を出た。

「とりあえず男子は空いてるアリーナ更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん」

どうしたんだ？ 急にそわそわし始めたけど。

「トイレか？」

「トイ……っ 違うよ！」

「そうか。それは良かった」

とりあえず階段を下って一階へ。

「ああっ！ 転校生発見」

「しかも秋茜君と一緒に！」

見つかった。クソ面倒だな……。

HRが終わってすぐ、各学年各クラスから情報先取のための尖兵が駆けだしてきている。

この波に飲まれたら、質問攻めのおかげく授業に遅刻、千冬さんの特別カリキュラムと出席簿アタックが待っている。

一回だけ波に飲まれて、千冬さんの特別カリキュラム受けたけど、アレはしんどい……。

軽く三途の川を泳ぎきるところだったわ。

「いたっ！ こっちよ！」

「者ども出会え出会えい！」

「秋茜君の赤髪もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

「しかも瞳はエメラルド！」

「きゃああっ！ 見て見て！ ふたり！ 手！ 手繋いでる！」

「日本に生まれて良かった！ ありがとうお母さん！ 今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

「いやいや、今年以外もちゃんとしたプレゼントしてやれよ。」

「な、なに？ 何でみんな騒いでるの？」

状況が読み込めないのか、シャルルは困惑顔で訊いてくる。

「……男子が俺達だけだからだろ」

「……？」

「？ なんで「意味がわからない」って顔すんだよ？ 少しは察してくれ。説明すんのだりいから……。」

「普通に珍しいだろ。IS操縦できる男って、今のところ俺達しかないだろ。それに専用機持ちだしな」

「あつ！——ああ、うん。そうだね」

「だから女子達はこんなに騒いでるんだよ。っと、悪いちょっと我慢してくれな」

「えっ？」

俺はシャルルを世間一般で言うところの『お姫様抱っこ』をしながら走り、女子達に捕まる事なく目的地に向かう。その間、シャルルの顔は赤くなっていた。

「到着つと」

いつも通り圧縮空気が抜ける音を響かせ、ドアが斜めにスライドして開く。第二アリーナ更衣室、無事到着というところだ。

「そついや、自己紹介がまだだったな。俺は秋茜天羽だ、まあ呼び方は何でもいい」

「う、うん。僕のことはシャルルでいいよ」

「わかった。てか時間ヤバイな……。すぐに着替えないと」

時計を見るとかなりギリギリだった。

言いながら制服のボタンを一気に外す。

「わあっ!？」

「ん？」

なんか、ひっかかるな……。

しかも、さっき抱きかかえたときのシャルルの体重、女子のそれとほとんど変わらなかったし、何より男が抱きかかえられたときに顔を赤くしないよな。

「なあ、シャルル。もしかしてオマエ……女か？」

「な、何のことかな？ あはははは……」

「理由があるなら、話さなくていい……。誰しも話したくないことはあるからな。さっさと着替えるよ」

俺はシャルルにそう言い、少し離れた場所に移動して着替えた。

「遅い！」

第二グラウンドに無事到着。俺とシャルルは一組整列の真ん中辺りにいる。

遅れて来たのは一夏、多分女子達に捕まって遅れたんだろうな……。

「くだらんことを考えている暇があったらとっとと列に並べ！」

ばしーん！

あ、一夏はまた叩かれてる。痛そうだな……。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

一組と二組の合同実習なので人数はいつもの倍。出てくる返事も妙に気合いが入っていた。

「今日は戦闘を実戦してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。——凰！オルコット！」

「な、なぜわたくしまで！？」

セシリアと凰鈴音でやりあうのか……？

「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出る」

「だからってどうしてあたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

「お前らすこしはやる気を出せ。——アイツにいいところを見せられるぞ？」

ン？ 千冬さん、今ふたりに小声で何かを言わなかったか？

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」

なぜかいきなりふたりともやる気をだした。
なんだ？ 勝ったら欲しいものでもやるって言ったのか？

「それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふん。こっちの台詞。帰り討ちよ」

「じゃあ、俺とやろうか……？」

「「嫌」」

「慌てるなバカども。対戦相手は――」

キィィン……。

何の音だ？

「あああーっ！ ど、どいてくださいっ！」

あ、何か一夏の方に――

ドカーン！

一夏は謎の飛行物体の突進を受け、数メートル吹っ飛んだ後ゴロゴロと地面を転がった。

……。

なあ一夏、何でオマエは山田先生のおっぱ――乳房を鷺掴みしてんだ？

早く山田先生の乳房を離せよ、てか俺と変われ！

いや、変わらなくていいや。千冬さんが一瞬だけど俺のこと睨んだし……。

てか一夏も大変だな。セシリアと凰鈴音がオマエのこと狙ってるぞ。

ドンッドンッ！

短く二発、火薬銃の音が響く。弾丸は的確に《双天牙月》の両端を叩き、その軌道を変える。

ワオ、山田先生やるね。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

ぱつと雰囲気がいつもの山田先生に戻る。くると体を回して起き上がると、肩部武装コンテナに銃を預ける。それからずれた眼鏡を両手で直した。

「さて小娘どもいつまで惚けている。さつさと始めるぞ」

「え？ あの、二対一で……？」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐ負ける。では、はじめ！」

号令と同時にセシリアと凰鈴音が飛翔する。それを目で一度確認してから、山田先生も空中へと躍り出た。

「手加減はしませんわ！」

「さっきのは本気じゃなかったしね！」

「い、行きます！」

言葉こそいつもの山田先生だったが、その目はさつき双天牙月を打ち落とした時と同じ鋭く冷静なものへと変わっている。

「さて、今の間に……そうだな。ちょうどいい。デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あつ、はい」

空中での戦闘を見ながら、シャルルがしっかりとした声で説明しはじめた。

「山田先生の使用されているISはデュノア社製『ラファール・リヴァイブ』です。第二世代開発最後の機体ですが、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発でありながら世界第三位のシェアを持ち、七カ国でライセンス生産、十二カ国で制式採用されています。特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替え（マルチロール・チェンジ）を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替えが可能です、参加サードパーティーが多いことでも知られています」

「ああ、いったんそこまでいい。……終わるぞ」

山田先生の射撃がセシリアを誘導、凰鈴音とぶつかったところでグレネードを投擲。爆発が起こって、煙の中からふたつの影が地面に落下した。

第八話（後書き）

感想などありましたら

お願いします。

第九話（前書き）

久しぶりの投稿です

すいません（´；ω；´）
色々忙しくて
凄く遅れてしまいました

PV：119、304アクセス
ユニーク：15、066人

になってて少し感動しました

ありがとうございますm（＿）＿m

では第九話です。

第九話

「くっ、うっ……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……。何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！ 無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！ なんですぐにビット出すのよ！ しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ……！」

「ぎぎぎぎっ……！」

…… 竜虎相まみえる—— つか犬猿の仲だな。
どっちの主張も地味にあってるぶん、余計にみっともない。
あいつら本当に専用機持ちと代表候補生かよ。

結局ふたりのいがみ合いは一組二組の女子がくすくす笑うまで続いた。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の实力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

ぱんぱんと手を叩いて千冬さんがみんなの意識を切り替える。

「専用機持ちは秋茜、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィック、凰だな。では八人グループになって自習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？ では分かれる」

千冬さんが言い終わるとすぐに、俺、織斑、シャルルに一気にニクラス分の女子が詰め寄ってくる。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「秋茜くん、わかんないところ教えて」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？ 同じグループにいれて！」

……… なんとというか、予想通りかつそれ以上の繁盛ぶり、一夏とシャルルはただただ立ちつくすだけだった。

俺の場所に集まった女子達には出席番号順に分かれるように告げた。

その状況を見かねたのか、あるいは自らの浅慮に嫌気がさしたのか、千冬さんは面倒くさそうに額を指で押さえながら低い声で告げる。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！ 順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

鶴の一声というやつだろうか。それまでわらわらとアリのように群がっていた女子達は、蜘蛛の子を散らすごとく移動して、それぞれの専用機持ちグループは一分二九秒で出来上がった。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

ふつつとため息を漏らす千冬さん。それにバレないようにしながら、各班の女子はぼそぼそとおしゃべりをしていた。

「……やったあ。織斑君と同じ班つ。名字のおかげねっ……」

「……うー、セシリアかぁ……。さっきボロ負けしてたし。はぁ……」

「……鳳さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよっ……」

「デュノア君！ わからないことがあったら何でも聞いてね！ ちなみに私はフリーだよ！……」

「……秋茜くん、秋茜くん。良かったら夕食一緒に食べよう?」

「……………」

ちなみに唯一おしゃべりが無いのが例のドイツ転校生ラウラ・ボーデヴィツヒの班だ。

張り詰めた雰囲気。人とのコミュニケーションを拒むオーラ。生徒たちへの軽視を込めた冷たい眼差し。さつきから一度も開くことがない口。

十代乙女もこれだけの鉄壁城塞には話しかけようがないらしく、みんなちよつとうつむき加減で押し黙っている。……ああ、なんか、あそこの女子がものすごく可哀想なんだが……。あの娘泣きそうだし。

「ええと、いいですかーみなさん。これから訓練機を一班一体取りに来てください。数は『打鉄』が四機、『リヴァイヴ』が二機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

山田先生がいつもより三倍——いや、五倍はしっかりしている。さつきの模擬戦で自信を取り戻したのだろうか? 良かったね。

それにしても山田先生の胸——でかいなあ。

千冬さんもアレくらいは……いらないな。千冬さんは今のままのが絶対に綺麗だし。

「……………」

バシッ！

「いつてえっ！ なっ、なんだ！？」

いきなり頭をなにかで思いっきり叩かれた。
スゲー痛い。多分今のは……………。

「おい馬鹿者。いま何か考えていなかったか？」

………… やっぱり千冬さんだった。

「すいません千冬さん…………、織斑先生。織斑先生は今のままが完璧で
素敵だなあと」

バシッ！

また叩かれた、凄い痛いです。

「何を考えているか、馬鹿者が。さっさと実習を始めろ」

そう言った千冬さんの顔はかすかに赤くなってるような感じがした。

「秋茜くん、ISの操縦教えてっ」

「ああーん、このIS重ーい」

「ねえねえ専用機ってやっぱりいい感じ？ いいなー、うらやましいなー」

「ん？ ああ……」

『各班長は訓練機の装着を手伝ってあげてください。全員にやってもらうので、設定でフィッティングとパーソナライズは切っておりません。とりあえず午前中は動かすところまでやってくださいね』

ISのオープン・チャネルで山田先生が連絡してくる。

とりあえず、班長だからやりますか。

「それじゃあ出席番号順にISの装着と起動、そのあと歩行までやる。終わったら、次のやつと交代な。一番目は――」

「はーいつはいはいはーいつ！」

すげえ元気な返事が返ってきた。片手を高々とあげているんだが、そこまでアピールしなくてもわかるから……。

「出席番号三番！ 安達美憂！ 水泳部！ 趣味は映画鑑賞とウィンドウショッピングあとお菓子作りだよ！」

「へえ、キミかわいい趣味もってんじゃん……」

「よ、よろしく願いしますっ！」

腰を折って深く礼をすると、そのまま右手を差し出してくる。

この娘も俺と付き合いたいのか……。絶対俺よりいいやつはいるのにな、もったいない。

「ああっ、ずるい！」

「私も！」

「第一印象から決めてました！」

他の女子も一列に並び、同じようにお辞儀をして頭を下げ、右手を突き出してくる。

「おいおい……オマエら、シャルルの方見てみな」

「「えっ？」」

俺がそう言って女子達はシャルルの班を見ると――

スパーン！

「……いったああっ！」「」

見事なハモリ悲鳴だ。一列に並んでいたぶん叩きやすかっただろうな。頭を押さえながら頭を上げたシャルル班女子一同は、そこでやつと目の前の千冬さんに気づいた。

「やる気があってなによりだ。それならば私が直接見てやろう。最初は誰だ？」

「あ、いえ、その……」

「わ、私たちはデュノア君でいいかな……なんて」

「せ、先生のお手を煩わせるわけには……」

「なに、遠慮するな。将来有望なやつらには相応のレベルの訓練が必要だろう。……ああ、出席番号順ではじめるか」

ひいっと小さく息をのむのが聞こえた。……生きていたらまた会おう。

そんなシャルル班女子の惨状を見て飛び火を恐れた俺の班の女子は流れるような動きで列を解散し、今は安達さんがISの外部コンソールを開いてステータスを確認している。ちなみに俺の班の訓練機

はリヴァイヴだ。

「じゃあ、始めるか……。そういや安達さん、ISには何回か乗ったよな？」

「う、うん。授業でただけだよ」

「なら問題ないか。とりあえず装着して起動までやるぞ。時間はみ出すと放課後居残りだし、ソレは勘弁してもらいたいからね」

「そ、それは嫌だね！ よ、よし。真面目にやろっ！」

というわけで一人目の装着、起動、歩行と問題なく進んでいく。
——はずだったのだが、二人目の装着の時に面倒くさいことになった。

「秋茜くん、コックピットに届かないんだけど……」

「……マジかよ」

やっちゃった。自分の専用機が普通じゃないから忘れてたけど、訓練機を使う場合は装着解除時に絶対にしゃがまないとけない。立ったままISの装着解除をすると、目の前のISのように立ったままの状態になる。

「どうしました？」

「あ、先生。えーと、ISをしゃがませるのを忘れてしまっ……」

「あー、織斑君とおんなじ失敗を……。そうですね、仕方がないので秋茜くんが岡本さんを乗せてあげてください」

「あ……はい、わかりました」

今、物凄い不快になることを言われたような気がしたが……。まあいい。

俺は混沌を展開し岡本さんを抱きかかえた。

「そんなに高くないけど、ちゃんと掴まってて。落ちるから」

「う、うん……」

遠慮がちに俺の腕を握る岡本さんを確認してから、ゆっくりと上昇する。といっても高さは一メートルちょっとくらいなので、たいしたことはない。

俺は落とさないように気を遣いながら、抱きかかえたままリヴァイヴのコックピットへと岡本さんを運ぶ。

「じゃ、背中からゆっくり入って。あ、そっちの装甲に手をかけるとやりやすいかも。わかるか？」

「だ、大丈夫」

まだ体を離していないので密着した状態での会話になってしまっ
……顔、すげえ赤いよ。

「じゃあ、離すけどいいか？」

「え！？ え、ええと……」

「なんかまずいか？」

「まずいつていうか、その、おいしいっていうか……」

「はあ……。離すからな。それと、ちゃんとISをしゃがませてな
……次も俺が運ぶことになったら面倒だから」

「わ、わかった」

「じゃあ起動してみて」

俺に促されて起動シークエンスをはじめ。開いたままだった装甲
が閉じて操縦者をロックすると、静かに起動音を響かせてリヴァイ
ヴが姿勢を直した。

第九話（後書き）

感想・意見等

お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5381r/>

インフィニット・ストラト-少年とバグ機、混沌-

2011年12月12日07時46分発行